2	7	0	1	6

令和６年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和７年（2025 年）２月 19 日
札幌市立福井野小学校

1 学校教育目標

「未来を開き 豊かな心をもつ子どもの育成」

2 令和６年度の重点目標

笑顔あふれ、皆がつながる福井野小学校
～人とのつながりを大切にし、進んで行動できる子どもの育成～
「知・徳・体の調和のとれた育ち」 「ICT を活用した教育」 「信頼される学校」

3 自己評価結果に対する学校関係者評価

重点	主な評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	実践結果と改善の方向	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
①学ぶ力	・学ぶ楽しさの実感、自ら学ぶ意欲の向上	B	子どもたちが自ら課題を見付け、自ら考え、自ら解決しようとする資質と能力を身に付けることができるよう基礎基本の定着を図り、人と学び合うことを大切にした授業を研究してきた。自分とは違う考えに触れることや体験的な学習を通して自分の考えを深め、「分かった・できた」と実感できるよう取り組んできた。アンケートからは、学ぶ力に関する項目について児童の肯定的な回答が上向きだが、「基礎基本の定着」「学び合い」については教職員・保護者の評価があまり高くなく、児童の認識とのずれがあった。 児童がいろいろなことに挑戦し、頑張っているという意識をもっていることを大切にしながら、個に応じた指導を充実させ、基礎基本の定着を図っていく。また、課題探究的な学習を計画的に進めていくことで、学ぶ楽しさを実感し、自ら学ぶ意欲の向上につなげていく。	A	A
②豊かな心	・人とのつながりを大切にする ・自分や相手を大切にする	A	子どもたちのアイディアを生かしたあいさつ週間や委員会活動では、みんなで一緒に頑張ろうと協力する心が育っている。「なかよし活動」や「太鼓活動」など異学年交流を通して、高学年のリーダーシップが醸成されるとともに、上の学年を手本にしたり下の学年に思いやりをもって接したりする姿がたくさん見られた。「あかじろう」（あいさつ、かたづけ、じかんを守る、ろうか歩行、うんどう）を意識した活動が充実してきて、自分たちの生活を自分たちでよりよくしていこうとする気持ちが育ってきている。 子どもたちの自己肯定感・自己有用感をより高めていくことができるよう、より良いかかわりを目指すとともに、子どもたちの頑張りやよい姿を保護者・地域の皆様に分かりやすく伝えていく。	A	A
③健やかな体	・運動の楽しさの実感 ・心も体も健康的に	B	楽しく体を動かすことができるよう、「縄跳び週間」「跳び箱週間」「休み時間活性化週間」の設定、外遊びができない時の環境整備（特別教室でドッチビーやボッチャなど）をした。外部講師を招いて、タグラグビー、サッカー、バスケットボールなどに触れる機会を設け、運動の楽しさを味わうことができた。SC による「命の授業」を実施し、自分の心の健康に目を向けたり、身近に相談することができる人がいることを知ったりすることができた。 児童アンケートでは、「進んで運動していない」と答える児童が一定程度いることから、児童自身が健やかな体づくりへの関心を高め、行動につなげていくことができるよう環境を整えていく。	A	A
④ICTを活用した教育	・ICT のよりよい使い手となる	B	全児童に配付されているタブレット端末を、「個人の学び」「集団の学び」において、学びの質を高める効果的な使い方ができるよう検証しながら取り組んできた。 学習の中で ICT を計画的かつ効果的に活用した実践を蓄積していくとともに、ルールやマナーを守ることや情報モラルの意識付けなど、家庭とも連携しながらよりよい ICT の使い手となる素地の育成を図っていく。	A	A
⑤信頼される学校	・保護者、地域、関係機関との連携	B	保護者・地域の皆様には子どもたちの学校生活の見守り、通学路での交通指導、楽しい学校生活にするための関わりなど、学校へのご理解・ご協力をいただき大変ありがたく感じている。 子どもたちが安心して登校できるように、また、保護者・地域の皆様に安心して子どもたちを任せていただける学校となるよう学校全体で情報共有に努め、指導力の向上により一層の努力をしていく。また、学校ホームページや「すぐーる」の活用、行事等を通して、保護者・地域の皆様に学校の情報や児童のようすをタイムリーに発信していく。学校を支えてくださっている皆様とのつながりを大切にし、丁寧に対応していく。	A	A

学校関係者評価委員による意見	・小学校では児童の頑張りを評価している。授業に参加し充実感を得ることで、児童は「できた」と感じているのかもしれない。児童と一緒に単元を振り返り、確認していくなど、先生と児童の認識が乖離していかないよう工夫していくとよい。 ・児童が自分たちの生活をよくしていこうという気持ちをもち、主体的に活動しているところが感じられた。 ・ICT のよりよい使い手となるよう、児童に身に付けさせたい力を明確にしたり、適切な課題を設定したりしていく必要がある。また、児童の発達を考え、タブレットに偏り過ぎず、書くことも大切にしていくとよい。 ・小学校と中学校は、それぞれに発達段階に応じた教育活動を進めている。小中が協力し、子どもたちの大切にしていきたいところについて共通認識をもち、小中の教育が連続性をもつような学校づくりを進めていってほしい。